大いなる遺産における暴力

チャールズ・ディケンズの「大いなる遺産」における暴力の要素を含んでいる。最も明白なものを数えてみても、二つの殺人事件と、二つの殺人未遂がある。すなわち、ダヴィッドが船上で宿敵コペンヘンと争い、コンペイイツを殺すのが一つ、マグウィッチの昔の妻モリーが、動機は説明していないが過去に殺人を犯したと述べてあるのがもう一つ。また、殺人未遂はオーリックのミセス・ジョーに対するものである。他に、殴る、殴打、格闘等の大小の肉体的、物理的暴力に加え、弱者いじめ、からかい、相手の意志の無視など精神的暴力とも呼ぶべきものが数々ある。本稿はそのような暴力の意味を探り、それが相手に与える影響を考察しようとするものである。

まず、この小説の主人公ビップスは、孤児であるため、姉とその夫ジョー・ガーダリーに育てられたが、この姉はひとりがっしりした手をしていて、ビップスばかりが育たされ、しばしばなげられたりする。彼女はビップスを「手塩にかけて育てあげた」（I brought him up by hand）、というところが自慢であるが、ビップスは、この言葉の意味がわからないままに、それがなされるために関係があると感じ、義兄も自分も、とまに手塩にかけて育てあげられたものと想像していた。また彼女は興奮すると、ピップを「くすぐり棒」でなぐりつける。'くすぐり棒というのは、先に蠍を

宮崎孝一
つけたむちで、私をなぐるたびに私の体とこすれるため、
滑らかになっていった。（三章）

ピップは、このような肉体的暴力の犠牲であるのみならず、精神的にも、さまざまな乱暴な扱いを受ける。

私はまるで理性や宗教や道徳の命令にそなき、最善の味方たちが止せないというのも聞かずに、図々しく生まれてきたのが、そのままに拝されている。（四章）

クリスマスのご馳走に招かれて、ガリャリ家の話を聞いたとき、私たちは、申し合わせたように、パンプルチックが他の大人たちも、申し合わせたように、彼女に対するピップの感謝がたたりないことを声をそろえて非難し、彼を跡に、こんな子は主人の金を盗み、また叔父を殺したジョージ・バーナーズのような男になるのが落ちだろ、と言する。このように幼いピップをなぶりも落とすことが大人たちには、ご馳走の味をいっぱい高める香料の役をしている。彼らはときどき私に話の矛盾を向け、それを私に音ずと突き刺さらないと、せっかくの好機が無駄になることもあるている。新しいピップの質問に、ミセズ・ジョーは次のように答えられ。どうするさからせようと思って、お前を手塚にかけて、育てあげたんじゃないだろ。そんなことをしたたら、人さまから褒められるどころか、それは非難的になったろう。人間が監獄の人が入れられるのは、人殺しをした、泥棒をしたからだよ。それでも元はみんな、いろんな悪いことをするからだ、元が監獄船に入れられるのは、人殺しをした、泥棒をしたからだ。

ピップは、初めてミセズ・ハヴィィシャムの邸、サティス荘に招かれてから家に帰りたとき、ミセズ・ジョーはパンプルチックに対して途方もない嘘をつく。ミセズ・ハヴィィシャムが黒いピロードの馬車に乗っていて、エスティラが金の
（以上）なお、揺るぎのない真実を追求し、啓蒙の道を進むためには、我々が行うべき事は、次の通りである。

1. 真実の追求
2. 啓蒙の道
3. 以上
ミセス・ジョーは、この攻撃を受けた後、思考力も記憶力も非常に障害を受けるが、気質は前と変わってはおらず、だらかになり、決してよくなる。ことに今まで何とか争っていたオーリックと和解したいという希望を身振りで表わしていたジョーは、彼女がアリ Gauge の態度はまことに不思議である。その理由を考えみてみると、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をかえって遠方に泥れいた自分を救っただけで、彼女は親に死ね、幼い弟をか

オーリックの狂験性は、この後も二度示される。一度は彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ

彼がピッブを沼地の小屋に誘い出し、殺害しようとするこ
この格闘の後ビップは、自分が年若い紳士の血を流した
りながら、やっと踏み止まった。「私は言った。」
「あたし、綺麗？」
「ええ、とても綺麗だと思います。」
「あたし、失礼だと思う？」
「この前のときほどじゃないんです。」
「この前のときほどじゃないんです。」
「ええ。」
この最後の質問をしたとき、彼女の顔は紅潮してい
た。そして私が答えたとき、あっけらかんとした
私の顔を平手でなぐった。
（十一章）
【少女時代のエステラはすでにこのように激しいものを持っ
ている。】
少年時代のエステラはすでにこのように激しいものを持っ
ている。サティスラを辞するとき、蒼白い顔の
少年に突然喧嘩を売る。「少年は口ほどにもなく腕力が
なかった。ビップはさんざんに彼を打ちのめす。その直後エ
ステラに会うと、彼女の顔は上気していて、嬉しそうにビ
ップを小径の中へ導き、キスしたけれど、もいいうちにビ
ップをビップでさしむける。このエステラの態度の激
えりしたりした。彼の心がこういう様々な方をするときにも、彼
が妹をはじめ大人たちから犯罪者扱いをされ続けてきた
ことの結果が見られる。後に「ロンドン少年隊」という名で、ミス・ハヴ
ジャムの遠縁に当ることがわかるが、彼はあの格闘のと
き、自分こそビップを打ちのめしたものを考えていた。
【ハーバート・ポケット君は、彼の意図と実際にを混同し
てしまっているねと私は思っていた。】（十一章）
ビップは
述べている。すなわちこの格闘は気の弱い二人の少年が、
互いに相手を傷つけた（あるいはそう思うように考えた
こと）で、結ばれた話として、他のもっと激しい暴力の例と対照され
て、ヒューマンな効果を発揮している。さて、美しい娘に成長したエステラが、青年になったビ
ップの真剣な求愛には見向きもせず、家柄がよくて金があ
りはするものの、甚だ鈍い男ドラマと結婚してしまって
とも、この小説の含む謎の一つである。彼についてビップ
は次のように記している。
いつも仮頬面をしていて、本を持って帰るときさ
え、その著者のために傷つけられたことでもあるかの
ような表情を示すベントリー。ドラマルは、私を知り
合ったとき、動作も、理解力も、すべて鈍重で、一にぶつり
っている。体つきをし、大きさ、不恰好な舌を口の中でゆっくり動き
かすぎを、彼自身部屋の中だらりだらり動き回る
のに似ていた。顔色が、高慢で、けんも棒で、打
も解けず、絵画心が強かった。サマセット州の素縁家
の生まれた彼を育て上げた未定年には達したものが
来た観客だったが、家の人たちは、こういう性質の組
み合わさった彼を信じ上げた未定年には達したもの
の、のろまの鉄物であることを知ったのだった。
（二十五章）

ドラマルは仲間の青年たちのぼけ者であるが、ビッ
の後見人ジャガーズ家の食事にビップその他招かれた
とき、ジャガーズだけは、ドラマルに対して強烈興味を示
す。彼はドラマルを「蜘蛛」と呼び、特に彼のために乾燥
し、若者たちが言葉のすえ興奮し、ドラマルが大コップを
投げつけるとすると、常に驚かす。別れぎわにビップに
投げつけるとすると、常に驚かす。
も、彼特有的心理が潜在していると思われる。モリーは、男
のそれにも負けていないほどの握力を持っており、この手でか
っけて殺人を犯したのだが、これは「餌い飼いらされた野獣」の
ようである。ジャーニーズはこのようにモリーを圧服したこ
とに満足を感じているのだろう。

このようにジャーニーズが、ドーマルの「本物」と呼ぶの
は、やはり、彼の中に狂暴なものを見出したからではないか
い。エスターレがドーマルと結婚する決心をするのを、彼の
財産以外に、彼のこの狂暴性に引かれたのである。少年
時代のビップはエスターレから侮辱され、冷たくあらわれ
ても、ただ涙を流すだけだった。青年になってから、ま
すます彼女に恋いが向けても、ただ憂愁に胸をふさがれて
彼女の家のもわりを徘徊するだけであった。エスターレに
は、このようなビップの態度は物たりなかった。エスターレに
告げたとき、ジャーニーズは次のように言う。

「あっは、あいつなりに有望な奴だよ。だが奴だって、
自分の気ままにばかりはなるまい。結局は意志の強かった
奴の方に強みがあるだろう。またの問題になったら、そうは
いかん。……ドーマルのようないい奴は、大きなか、すぐに
のかどうか。すぐで、うなるかもしれないし、しかも
（四十八章）

エスターレは、彼女特有的激しい気性によって、サディズ
ムとマヘズの奇妙な混合した動機によって、ドーマルに興
味を感じたのであった。この点、彼女の傾向は、ミーセレ
のオーリックに対する気持ちに通じるものがある。

しかし、結婚後のエスターレは、ドーマルに繰り返しながら
を乱暴に批、振る舞われて死んでしまう。暴力は結
局悲劇にしか導かなかった。

三
する尊敬の気持ちを示そうがための、トラップの浅はかな計算による暴力だった。
後にピッブがすっかりロンドン紳士になりすまして故郷の町を訪れたとき、偶然このトラップの小僧に会う。すると小僧はわざと手足をふるわせ、歯をがたがた鳴らしあっては同様の動作を何度か繰り返し。「こわいよ」と叫び、最後には哀れっぱい声で鳴き声のまねをしたが、これは鍛冶屋時代のピッブを知っていることをかすけていったそうだ。トラップの小僧はこうしてピッブの思い上がれた冷水を浴びせたのである。
ピッブには大きな財産がこちらがこだわったんだと知ったとき、今この小僧の気持ちが底に、まじめな心の動きがあったのだろうと解釈することもできる。オーリックにトラップとピッブの見たこの好奇心に発するものと見られないこともないが、これこそは共に友人たちを巡り顔の小僧と見さえすべてがらしと態度を変えた。パンプルーチェの約束は今見た通りである。このうれししい手順に仕事を トラップに出資してもらうことを願ってここ、ピッブの小僧の取った態度は、たしかにいたずらには違いないが、内心に一つの健全な判断を残したもののいうことができ。後にピッブが幼時から犯行者の意識を植えつけられるのには、前に見たように妹の教育による所が大きいが、さらにはそれによって決定的なものにした。彼が脱獄囚マグウィッチにおとこがしたかどうか、妹と義兄の所から食物や肉を盗み出し、マグウィッチは胡に会ったピッブを逆さに吊し上げた。彼の肝臓をねばっている男のいるから、しょせ約束を果たさなければ、そ
ことがこの暴力に屈服して盗みを働き、その後長く囚人たちの陰謀で結ばれていることを罪悪感と自己嫌悪を覚えることになる。
しかも、マグウィッチによるピップの被害は、これに留まらない。マグウィッチは、紳士階級に属するコンペイソンに利用され続け、罪を重ねてきた怨みから、オーストリアで預けた金の力で、ピップを紳士に仕立てて、自分のために働かせようと考える。ピップは自分に与えられる莫大な金の出所を知る間もなく、鉄道屋の従業員から足を洗えたことを喜び、行く行くはエスティラと結婚して裕福な暮らしをするつもりであった。この小説の最後の部分では、ピップはマグウィッチの気持ちは理解するが、彼の人生は狂わず否定的な力として働くのである。同様のことは、ミス・ハヴィッシュは、若きときを捧げたコンペイソンに裏切られたことから、男性全体に対する不信を抱き、男性に対する復讐心を満足させるために、ピップがエスティラを愛するようにし、エスティラが自分に報いてくれないことに彼が悔悩するのを見て、ひそかに笑っていたのである。ピップはマグウィッチと関係における同様、ミス・ハヴィッシュはピップとの関係に物理的、精神の暴力が描かれていく。しかも、その暴力がときには彼を魅惑する力があり、また善意に発すことさえあることも見た。しかし、所詮暴力は暴力であり、その力が強く、その対象が弱ければ弱いほど犠牲者に大きな苦痛と被害は大きいことが示されている。